

平成三〇年 六月三〇日発行
三重大学 日本語学文学第二九号 抜刷

ラウンドテーブル「フィクションと事実」
(坂堅太・菅利恵・村口進介・吉丸雄哉) 報告

会場…三重大学人文学部校舎第一会議室

日時…平成二九年六月二四日

司会兼発表者 吉丸雄哉 (日本近世文学)

発表者 村口進介 (日本中古文学)

坂堅太 (日本近現代文学)

菅利恵 (ドイツ文学)

吉丸雄哉

ラウンドテーブル「フイクションと事実」 (坂堅太・菅利恵・村口進介・吉丸雄哉) 報告

吉丸雄哉

会場…三重大学人文学部校舎第二会議室

日時…平成二九年六月二四日

司会兼発表者 吉丸雄哉(日本近世文学)

発表者 村口進介(日本中古文学)

坂堅太(日本近現代文学)

菅利恵(ドイツ文学)

はじめに

三重大学日本語学文学大会では講師の講演が毎回行われるが、平成二九年度は坂堅太先生と村口進介先生の依頼もあって、ラウンドテーブルを行った。ラウンドテーブルはここ二、三年で実施されるようになった公開討論の形式である。シンポジウムによく似ており、中心人物が各自基調の発表をして、それから発表者同士あるいは会場からの質問に答えて討議していく。

日本文学協会の大会や日本近世文学会で実施されており、私は平成二八年度に日本近世文学会で聴衆として参加の経験があった。典拠や新出資料の紹介が多い学会発表に比べると、読みの問題などを柔軟に討議しやすく、文学の根源的な部分を考えるのに向いていると感じていた。三重大学日本語学文学大会の参加者は三重大学所属の学生や留学生在がほとんどで、専攻分野もさまざまなたため、知識を増やす講演のかわりに、自分の頭で考える機会を設けてみたいと思ったのもあった。

ラウンドテーブルの形式は、文字通り円卓あるいは中心に発

表者が丸く座ってお互いに言い聞かせるように話をし、それを囲んでいる聴衆が自由に質疑をするようになっていた。シンポジウムやフォーラムに比べて気楽な感じで展開するのが特徴である。当日は発表者のほかに二〇人ほどの参加者がおり、結局口の字に机を並べて、それぞれの辺に配置された発表者が話をすることになった。円卓ほどではなかったが、全員が互いの顔が見える所で着席しているのは、発表者を前に横並びになるより自由さがあつたと思う。

テーマが「フィクションと事実」に決まったのは坂先生と村口先生の提案である。文学作品におけるフィクションと事実の関係をさまざまな作品を例に考えていくことになった。坂先生によれば、私小説を含めた小説を事実として受けとめる学生がいることや、最近ではフェイクニュースが増えてきて、フィクションと事実を見つめ直すことが発案のもとにあつたそうである。坂先生の発案のきっかけのひとつに、大浦康介『フィクション論への誘い』（世界思想社、平成二五）があつたという。フィクション論は欧米では研究の一分野として確立しており、「日本では」フィクション作品（小説、演劇、映画等）を論じればフィクション論だといった短絡的な誤解も根強い」（大浦康介、一頁）とした該書では小説・漫画・映画や歴史叙述はもとより「遊び」「プロレス」「ヴァーチャルリアリティ」などを扱っている。今回のラウンドテーブルは文学に限定しており、なおかつ日本文学協会大会などの（素人では読んでよくわからない）近代部門の

ラウンドテーブルに比べて、とても初歩的な議論を交わした。フィクション論に知悉した議論を行うよりもよかつたと思うのだが、ひよつとしたら坂先生にとつては打てば響く感じではなくて拍子抜けしたかもしれない。

文学に限るとしても、日本文学の三人でやってみようと議論の展開が予想され過ぎて面白くないので、ドイツ文学を専門とする本学の菅利恵先生に参加していただくことになった。菅先生がちょうど「フィクションと現実」をスタートアップセミナー（二年生向けで導入ゼミナール）のテーマにしていたのもあつた。「フィクションと現実」がテーマであれば、フィクションが現実に影響を与えていく過程が論じられたと思う。打ち合わせで、「フィクションと現実」をテーマにする、あるいは「フィクションと事実」の仲間として議論の対象に加えることも検討したのだが、議論が散漫にならないように当初の目的通りテーマは「フィクションと事実」で開催することになった。

基調報告一五分をそれぞれ四人で行い、一時間。その後、発表者同士の討議と会場からのレスポンスパーパーへの応対で一時間半の予定であつた。レスポンスパーパーへの対応を一時間半も確保したのは理由があつて、過去に体験した日本近世文学会のラウンドテーブルが議論の時間が二〇分ほどしかなくて、参加者同士で「あと一時間は欲しかった」とか「午後はまるまる議論の時間でよかつたのでは」などと話し合つたからである。発表して終わりなら、ラウンドテーブルもシンポジウムも変わ

らないだろう。

ところが、それぞれ白熱した発表になって、各人が三〇分ほどつかって発表したので、終了が当初の予定より一時間遅れてしまうことになった。最初に発表した村口先生が時間を大幅にオーバーしたので、あとの発表者も楽になったようである。学生にとっては悪い見本だが、発表で十分に見解が示されたので、それからの議論もしっかりできたように思える。

ラウンドテーブル発表要旨

以下、発表後に発表者自身に作ってもらった発表要旨を載せる。

(一) 村口進介発表要旨

「日本紀などはただかたそぼぞかし。これら(物語)にこそ道々しくくはしきことはあらめ」(『源氏物語』蜩巻)という一節を含んで有名な、光源氏の語る物語論を通して、『源氏物語』における物語と歴史の関わりについて述べた。

「まことにやいつはりにや」と思いつつ物語に耽溺する玉鬘との対話で、やや冗談めかしながら光源氏は、さきの言葉で日本紀などの歴史書は一面であり、物語にこそ人間の真実が描かれているのだと、当時の通念を覆すような発言をしてみせる。

物語は「さまざまにめづらかなる人の上などを、まことにやいつはりにや、言ひ集めたる」ものであるが、ありもしない出

来事を描いたり、人物をおおげさに表現するのは人間の真実を

言うためであって、「そらごと」だと決めつけるのは物語の実情にそぐわないという趣旨は、「世の中に多かる古物語」を見ても「そらごと」ばかりで、だから自分は「人にもあらぬ身の上まで」も「書き日記」にするのだと宣言した藤原道綱母の『蜻蛉日記』冒頭文と対照させてみると、なお興味深い。

この物語論では「歴史」と「物語」をあたかも二項対立的に捉えながら語り進めるようでありながら、そう単純に割り切れる関係にないことは『源氏物語』自身が表示すところである。『源氏物語』には「宇多帝」「紀貫之」といった実在の人物の名前が見え、歴史的事実を踏まえた書きなしは准拠の方法としてよく知られているが、一方で「河原の大臣(源融)の御例をまねびて、童隨身を賜りたまひける」(澤標巻)、「良房の大臣と聞こえける、いにしへの例にならずらへて、白馬ひき」(少女巻)といった歴史的事実の確認されない事柄も書き込まれているように、准拠とは、事実と虚構をなймаぜにして、両者の境界を曖昧にする物語の方法であること、そして物語論が今なお味読に耐える、優れた虚構論であることを述べて報告とした。

(二) 吉丸雄哉発表要旨

「近世人はフィクションと事実をどう認識していたか」という題で発表を行った。近世人が虚構と事実をどのように捉えていたのかを「虚実皮膜論」「狂言綺語」「実録体小説」「戯作の

中のメタフィクション」を切り口に考察した。近松門左衛門の虚実皮膜論では、近松は芸というものは実と虚との皮膜の間にあるものであり、虚であつて虚でなく、実であつて実でなくこの間に慰みがあるとした。これは近松門左衛門などプロの演劇作者にとつて自分が書いているものがフィクションであるという意識があつたこと。フィクションであることを悪とせずフィクションの効用を認めていたこと。真実を表現するためにはある程度のフィクション化(デフォルメ化)が必要になることを示し、単なるフィクションと事実の二分法で考えていけないことがわかる。

また、「狂言綺語」という考え方がある。『雨月物語』の序文は狂言綺語論である。仏教的な見方ではフィクションは人の心を迷わせるよくない存在(狂言綺語)であり、名作の作者は天から処罰されたという説話が日本にも中国にもあるが、古今の名作はフィクションが事実と見まがうほどのものであるとする。全体から天から罰せられてもフィクションの作り手とならうとする意志が読み取れる。

実録体小説とは近世文学のジャンルである、現実にあつた事件をそのまま書き記したように見せかけるが、実際は大きく脚色されており、むしろ荒唐無稽で事実から遠い内容である。写本でのみ流通された実録はそれでも一応の筋は通っており、版本では伝えられない隠れた真実を見た気にさせるメディアでもあり、娯楽小説でもあつた。

戯作の中には作中人物が創作上の人物であり、作者が存在することを意識した発言をするメタフィクションが散見する。その理由は、戯作は笑いに重点があることや戯作者戯作(戯作者を主人公とした戯作)が多いこと。山東京伝、十返舎一九、式亭三馬といった戯作者たちがすでに有名人であつたため、作品の中でも仲間の戯作者を登場させたり、自作、他作への言及を登場人物に行わせる商業主義が背景にある。

(三) 坂堅太発表要旨

本発表では、「フィクション」と「事実」との関係をどう捉えるかに関し、私小説、そして戦後アヴァンギャルドの「記録主義」という二つの事例から考察した。

私小説とは一般に、作家が自らの私生活についてほとんど虚構を交えることなく忠実に再現した自伝的散文作品、と定義される。では、「小説」でありながら「虚構性」を排するという矛盾を抱え込んだ私小説は、どのように創作/受容されたのか、またそこでは「フィクション」/「事実」の差異はどのように意識されていたのか。こうした問題について、一九二〇年代の私小説論争での議論を補助線としながら分析した。

一方、「事実」を描くために「虚構」を取り込もうとしたのが、安部公房などの戦後アヴァンギャルド作家により提唱された「記録主義」である。一般に〈ノンフィクション〉とされるルポルタージュやドキュメンタリーなどの作品において、何故虚

構性が必要とされたのか、ここでは「事実」はどのようなものとして認識されていたのかについて、一九五〇年代後半に活動していた「記録芸術の会」周辺の議論を確認した。

私小説、「記録主義」という二つの事例の考察を通じて見てくるのは、「フィクション」と「事実」とを切り分けることの難しさである。もちろん「事実」の尊重は必要ではあるが、両者を安易な対立関係で捉えてしまうことは、「記録主義」が主張したように、むしろ「事実」そのものの軽視につながるのではないか。「事実」を尊重するためにこそ、「フィクション」固有の可能性を追求する必要があるだろう。

(四) 菅利恵発表要旨

「事実を意識するフィクション—啓蒙時代のドイツ—」
啓蒙時代のドイツ語文学では、しばしば、冒頭に置かれた「編者フィクション（虚構の編者による前書き）」の中で、これから提示されるフィクション世界と事実との関係性が話題にされている。そのような「編者フィクション」の背景としては、当時「事実」ということの意味と価値が急速に変化していたことが考えられる。すなわち近代化の過程においては、科学の世界で実験により帰納的に定理を導き出す手法が確立され、司法の世界では有罪判定のよりどころが自白から証拠へと変化したように、先入観を排し、経験的な事実をもとにして事象を解き明かそうとする姿勢がさまざまな形で強められていた。ドイツ語で事実

をあらわす単語 (Tatsache) が十八世紀に登場し、急速に広まったということも、文化の中で経験的な事実の重みが拡大した時代の流れを端的に物語っている。事実との関係性を先回りして弁明しようとする「編者フィクション」の語り口には、客観的な事実と合致しないフィクションを語ることに、もはや無自覚ではいられなくなった時代状況を読み取ることができる。

その一方で、啓蒙時代においては、フィクションに固有の真理があることを主張する言説も登場した。経験的な事実が認識の基盤に据えられたことは、事実とフィクション、またフィクションと読者の関係性そのものを変化させたのである。何が事実で何がフィクションであるのかが明確になってゆくとともに、フィクションは、経験的な事実の世界とは完全に異なる、しかしながら独自の意義を持つ表現形態としてとらえなおされることになった。フィクションに固有の真理ということが掲げられる中で、ドイツ語圏では、十八世紀の終わりから十九世紀の初頭にかけて、非現実の空想こそを持ち味とするロマン主義の文学が花開くのである。

印象記

それぞれの発表内容に関して、稿者が感じたことを記す。

村口先生の要旨内の「准拠」とは源氏物語研究の用語である。「歴史的事実を踏まえた書きなし」が源氏物語の特徴であるが、

歴史的な事実と源氏物語の内容を比較するのは四辻善成『河海抄』（貞治元年（一三六二）頃成）以来の考え方で、源氏物語に歴史的なモデルを探る方法であった。歴史的な典拠探しなど、それこそテクスト論が木っ端みじんにしてきた印象があり、二〇世紀末ごろの「フェミニズム」「王権」「身体」などが研究の主流だった時代から、最近の源氏物語研究は歴史的な事実との比較研究、いわば大昔の准拠研究に回帰したように思える。歴史研究の補助史料として、文学作品が読まれている印象もあるが、稿者も化学の資料として小説を使うことも多く、文学研究全体の潮流なのかもしれない。蜚巻の物語論のいうように「作り物語であってもまったくのそらごととは言いつれない」ところに准拠研究から離れられない魅力があるのかもしれない。なお、『蜻蛉日記』も含めて日記文学が必ずしも真実を記録しているわけではないことは、村口先生が発表中に述べた。いずれにしても千年ほど前から人々が創作行為をここまで意識的に考えていたことに今さらながら驚く。

吉丸の発表のうち近松門左衛門「虚実皮膜論」は高校の古典教科書にもよく収録される文章である（もともと授業で読まれる機会は少ないだろう）。村口先生の発表が事実と虚構の単純な二項対立にならなかつたように、近松も虚と実を単なる対立概念にはしなかつた。近松の場合、人形劇なので、虚と実は鮮やかに意識されただろう。『雨月物語』に見られる「狂言綺語」の意識は現代人には珍しいはずである。事実であれば「小説家になろ

う」サイトの投稿者のおかげで地獄は大賑わいが約束されている。「小説」の語の初出である『漢書』芸文志「小説家流蓋出於稗官、街談巷語、道聽塗說者之所造也」から「小説」が信用のおけない単なる世間の噂話であるように、虚構へのマイナスイメージは存在し、そしてそれはごく最近までであった。小説を読んでいるとそんなものを読まずに勉強しなさいと親に怒られるのは身の回りによくあつたと聞く。実録体小説の概念は中国における稗史小説（三国志演義や水滸伝）に似ている。近代以降の時代小説で、虚構の度合いの大きいもの（山田風太郎や荒山愼）はこれらの仲間といえよう。メタフィクションの部分は、外してもよかつたのだが、近世人が現代人と同じように虚構になじんでいる例として残した。

坂先生は作品の多い近現代を対象にすることやもともとと発案者だったので、何を話すのか興味があつた。森鷗外「歴史其儘と歴史離れ」関係がくるかと思っていたがはずれだつた。発表内容は「フィクション」とは？、「私小説」について、「戦後アヴァンギャルドの「記録」について」の三本立てで、「私小説」に関しては私小説論争（久米正雄「私小説と心境小説」であつた。本当であるふりをする「嘘」とは違って、フィクションは「本当ではないけれども本当らしい。リアルではないけれどもリアリティがある」という意味から、「リアリティのないリアル」や「リアリティのあるフィクション」もあるという指摘だつた。ルポルタージュやドキュメンタリーにおける虚構性の問題はそ

れこそ現代のフェイクニュースなどにかなり近い問題なのだろうが、坂先生が結論づけているように単なる「フィクション」と「事実」の二項対立では割り切れまい。

なお、今回は日本文学では上代文学と中世文学の発表者がいなかった。もしいたなら、上代なら古事記や日本書紀といった神話や民話の問題。中世なら、徒然草七三段「世に語り伝ふること、まことはあいなきにや、多くは皆虚言なり」をめぐる議論は入ったであろう。また、久米邦武と重野安繹らの提起よりはじまった太平記は史書か文学かという論争も入ったかもしれない。

菅利恵先生の語ったことの要約は八〇〇字では少なかつたことと、本稿を読む人は日本文学に日頃興味がある人が多いだろうから補足しておく。菅先生はもともと一八世紀ドイツ文学、とくに一八世紀後半の劇作品を対象にしている。ずばりヨーロッパでの一八世紀が「啓蒙時代」で、近代市民社会のはじめりにあたる。レジュメでは「編者フィクション」の実例にゲーテ『若きヴェルターへの悩み』（一七七四）、シュナーベル『フェルゼンブルク島』（一七三二）、ヴィーラント『アガトン物語』（一七六六―七七）の冒頭があげられた。それぞれ、意図するものが違ったのだが、「事実との関係性を先回りして弁明しようとする」のが共通していた。より具体的にいうと、虚構を述べる前にこれは事実なのだと言者に訴えかけているのである。これに対して、源氏物語の物語論や私小説に関する考え方は比較す

るに足りるだろう。日本近世小説にはかならず序文が含まれるのだが、諸国から変わった話を集めた奇談の序文が「編者フィクション」に似ていると感じた。また、馬琴の八丈伝のなかで読者に道徳を訴えかけるような慨嘆を記す（浜路くどきの結語など）に似たものを感じた。「編者フィクション」のもとにフランス・ペーコンの経験主義があることを菅先生は説明してくれたのだが、そういった哲学思想が文学作品に大きな影響を及ぼしている部分は日本文学との相違点と感じた。また、魔女裁判の話もあげてもらい、事実の確定からフィクション性が明確になつてくることや「誰が何をフィクションと決めて、誰が何を事実と決めるか」というのが政治的な問題であるという話もあった。日本文学も仏教や儒学など思想の影響はあるのだが、思想の更新が文学作品の潮流を変えてしまうところまでいかないのではないか。話の末尾も一八世紀の啓蒙主義が世紀末から一九世紀初頭にかけてロマン主義に替わるのも印象的であった。『水妖記（ウンディーネ）』と『黄金の壺』といった「ファンタジー文学のみたいなもの走り」がでてきたのは「フィクションに固有の真理」があることの認識からという解説と受け取った。菅先生の話はとにかく面白くて、全文掲出できないのが残念である。

レスポンスペーパーへの回答と討論

あらためてレスポンスペーパーを読み直し、応答のテープを聴き直すと、個別のレスポンスペーパーは真摯に問うてくださったのに時間の関係でわりと大つかみな解釈と似通った質問をひとつのものとして回答をしたのは申し訳なかった。ただし、回答は質の低いものではなかったと思う。以下、質問から主なものをとりあげて、それへの回答や発表者同士のやりとりを記す。会場とのやりとりもあつたのだが、ここにもまく記せず、シンポジウムのように記録することになったのは稿者の力不足である。

○フィクションの効用

「フィクションが嘘と見なされて、よいものではないという評価があつたにもかかわらず、源氏物語が当時から今まで評価されて残ってきた理由。いつから作家が作品を書くのがよいことだと認識するようになったか」「フィクションがなぜ必要とされたのか」というフィクションへの価値判断の質問があつた。吉丸から本居宣長『紫文要領』の「ものあはれ」論が出され、村口先生からは院政期ごろから源氏物語が理想の政治世界とみなされるようになった過程や江戸時代の遊女にとって恋愛の手の本の必読書になったことの紹介があつた。坂先生からはフィクションを読むのは究極的に面白いからであり、また文化的に豊

かに生きられるので善悪の問題でないとの指摘があつた。菅先生からは、レトリック、フィクション、物語を介して社会の移り変わりを見るには有効という指摘があつた。それぞれ効用を述べた。

○事実とフィクションの前提

「歴史を用いて作っていったフィクション」のうち、フィクションを事実めかして使っている場合（芥川龍之介『奉教人の死』、『ダヴィンチ・コード』を、読み手が事実として錯覚してしまう場合にその作品は成功といえるのか、という質問があつた。歴史や事実の利用の問題である。坂先生からは歴史も究極的には物語だというヘイドン・ホワイト『メタヒストリー』（二〇一七年九月に翻訳が刊行。この時点で邦訳はなかった）の紹介があつた。菅先生からは事実は事実として大事にする視点があつてフィクションを初めてフィクションと楽しめるのであり、どうせすべてがわからないのですべてフィクションでいいのだというのは近代から逆戻りしているという指摘があつた。

○心内語の問題

心内語に関して実録体小説で第三者が知り得ない心内語が書かれていることをフィクションの前提とした吉丸に対して、村口先生からは歴史物語『栄花物語』に心内語が多く、あり得た歴史を書くのに心内語が有効という指摘があつた。坂先生から心内語が入るリアリズムの問題は近代に入ってからという指摘があり、菅先生からは自然主義だと心内語は排除されるという

指摘があった。

○フィクションと啓蒙

菅先生からロマン主義の作品が登場したときに、一八世紀の人が怒ったものがそれが事実とフィクションの真実を分けるリテラシーが登場したときにファンタジーを許容する土壌ができていったと指摘があった。吉丸からは馬琴の読本などが稗史七則などを記して啓蒙的なのは読者をフィクションに慣らしていく目的があったのではという話があった。

○携帯小説のリアリティ

事実であることを触れ込みにする小説や映画をどうとらえるかという質問があった。村口先生によれば携帯小説はリアリティがないが自分の物語として語った点がミソ。非常にご都合主義的な内容だが、あくまでそれらがリアルとされて人気を博したことに、あの現象の意味がある、と坂先生は答えた

○竹取物語とSF

菅先生の発表の最後でロマン主義の時代にSFめいた話が出てきたことについて、村口先生から『竹取物語』はSFという指摘があった。菅先生からもヨーロッパ文学の伝統として『本当の話』という月に行った人の話があつて、でたためで悪い例として認識されていたことの紹介があつた。そこから仏教やキリスト教と真実性の話になり、それをうけて吉丸からは月世界人のようなものは当時の人は意外と信じていたのではないかという応答があつた。菅先生からは啓蒙時代では割と柔軟に現実

をとらえていてキリスト教的世界観と一致しない話を受け入れており、許容度の高さがあることの紹介があつた。

まとめ

討論のまとめに、村口先生からは現代ではフィクションを読む側の力が落ちていくという見解があつた。吉丸からは不確定原理から物理学では客観的な観測が不可能であることの指摘があつた。ある出来事が完全な客観性をもって記述できるかといえば、不可能であつて、量子力学において、原子の位置と運動量の両方を正確に知ることは原理的に不可能という不確定性原理がそれを証明しており、小説や物語においても書き手・語り手の主観が入った叙述にならざるを得ない。むしろ、創造的な内容であることが文学の魅力になっているというのが吉丸の立場であつた。坂先生からは事実とフィクションの区別ができないが、尺度を持つことが大事とする意見があつた。菅先生は事実が感情移入の道具になつていくこと。ブレヒトが感情移入の道具になるリアルを批判していたこと。現代ではミステリー小説にリアリズムが生きているものの、別のリアリズムがあつていいのではという話で締めくくつた。

議論しているときは気がつかなかったが、原稿を整理していると「全部フィクションでいいじゃないか」という吉丸と、「フィクションの効用を認めよう」という村口先生、「事実とフィク

シヨンは区別できないがフィクションを読み取る努力はすべ
き」という坂先生と、事実とフィクションの区別に意識的で意
欲的な菅先生とそれぞれ立ち位置が違うことに気づく。菅先生
がベーコンなど事実をつきつめていく哲学を基盤にしているこ
と。また、一八世紀ヨーロッパにおけるフィクションと事実の
問題が政治的であり、市民社会の形成と関わっていることが理
由であろう。司会であつた稿者が気づいていればもつと火花散
る議論へ誘導できたのかもしれない。吉丸は不確定原理に拠つ
て最初から匙を投じているし、すべてフィクションで構わない
という態度でフィクションに淫してしまっている。それは地獄
行きとわかつていながらフィクションに突っ込んでいく上田秋
成のような近世人の態度と同じなのかもしれない。議論の中
で、「事実に基づいた感動の実話」という宣伝文句の映画が実際
は嘘だつたら腹が立ちますか?」というものがあつた。稿者は
腹が立たないのだが、不愉快に思う人のほうが多いだろう。こ
の稿を最後まで読み終えた人も先の問いについて少し考えてみ
て欲しい。

「よしまる かつや 本学教員」